

生存科学研究ニュース

Vol. 32, No.4

2018.1 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

ごあいさつ

—生存科学研究所のさらなる発展のために—
理事長 青木 清



明けましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願ひします。
公益財団法人生存科学研究所は
1984年に財団法人生存科学研究所と
して設立されました。当財団は創立

者にあたる故武見太郎先生が日本医師会会長を退任された後、理念である人類の生存を守るためには人類の将来を展望してあらゆる領域から総合的に「生存」の課題を科学的に取り組むための生存科学研究会を設けて勉強会を開始しました。

この勉強会を発展させて 1984年3月に財団法人生存科学研究所を設立しました。

1984年3月には先生は故人になっていましたが勉強会に参加していたメンバーが中心となって、武見思想を日本国民だけでなく世界的に発展させるべく開設したのです。

当研究所はこのように、生存科学は科学的技術的な知だけでなく統合的な叡智をもって新しい学術分野として大きく発展させるよう、生存科学に関する自主研究・助成研究を様々な視点から行い、さらに成果を公開すべくシンポジウム、あるいは学術誌「生存科学」を通して、会員はじめ一般の方々とその成果を共有するよう努めてまいりました。

このような次第でこれまでに生存科学研究所は設立30年を記念して、故高桑栄松先生のご寄附により、シンポジウムを年1回開催しましたが、これは故高桑先生が武見先生の理念である生存の理法に賛同しご寄附いただきましたことを尊重してのことです。

ところで現在の世界の社会情勢をみていると地球規模としての生存科学の推進を必要としています。2017年度に当財団が開催しました第5回生存科学

シンポジウムは「よりよい生存のために—差別と排除を超えて—」のタイトルで行いました。これは平和な社会を維持していくためには現代の日本で求められている課題です。実りあるシンポジウムでした。

私たち生存科学研究所の所員は本年も生存科学研究所発展のためにつくす所存です。何卒よろしくお願ひします。

研究会等日報

2017年10月～2018年3月

- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 10月3日(火) | 第7回みらいカフェ |
| 10月13日(金) | 第13回健康価値創造研究会 |
| 11月13日(月) | 第8回みらいカフェ |
| 11月21日(火) | 学術誌編集小委員会 |
| 11月28日(火) | 自主研究ヒアリング(安梅研究会) |
| 12月5日(火) | 第9回みらいカフェ |
| 12月7日(木) | 自主研究ヒアリング(資本主義研究会、森下研究会、森本研究会) |
| 12月9日(土) | 第5回生存科学シンポジウム |
| 12月13日(水) | 第2回常務理事会 |
| 12月15日(金) | 第6回医療政策研究会 |
| 12月18日(月) | 自主研究ヒアリング(医療政策研究会) |
| 12月22日(金) | 自主研究ヒアリング(等々力研究会、河原研究会、藤原研究会) |
| 12月27日(水) | 第1回ライフイノベーション研究会 |
| 1月12日(金) | 第14回健康価値創造研究会 |
| 1月31日(水) | 自主研究ヒアリング(吉田研究会) |
| 2月4日(日) | 第1回ACE研究会 |
| 2月7日(水) | 第10回みらいカフェ |
| 2月9日(金) | 第7回医療政策研究会 |
| 2月21日(水) | 学術誌編集小委員会 |
| 2月22日(木) | 第8回医療政策研究会 |
| 2月23日(金) | 第3回常務理事会 |
| 3月7日(水) | 第12回資本主義研究会 |
| 3月15日(木) | 第9回医療政策研究会 |
| 3月23日(金) | 第10回医療政策研究会 |
| 3月29日(木) | 第3回沖縄と日本の比較の視点から社会とwell-beingを考える研究会 |
| | 第2回ACE研究会 |

第5回生存科学シンポジウム 開催

より良い生存のためにー差別と排除を超えてー

実行委員長 松下 正 明



青木理事長ごあいさつ

第5回生存科学シンポジウム「より良い生存のためにー差別と排除を超えてー」が、2017年12月9日、上智大学四谷キャンパスで開催された。

全世界的に、そしてあらゆる領域や分野で、人間が、共存・共生していくべき同じ人間に対して、偏見や差別を抱き、彼らを排除、抹殺していくという嘆かわしい現象がはびこっているが、人間の生存の理法を追究している生存科学研究所の使命として、人間の生存を脅かす差別・排除現象を取り上げ、その実態や対策を考える必要があるという視点から、本シンポジウムは企画された。



藤原先生
基調講演司会

まず、基調講演は、森千香子一橋大学大学院法学研究科准教授により、「『分断する社会』はどのように形成されるのか〜現代フランスの事例を中心に」と題されて行われた。

パリ、サン・ドニ同時多発襲撃事件や排外主義政党の勢力拡大などフランスの現代社会・政治の不安定さの背景にある象徴的なものとして、旧植民地出身のマイノリティ住民たちがパリ郊外の老朽化した団地に隔離され、貧困と差別のなかに放置されている現象、さらにはそのような状況におかれた移民2、3世の問題を取り上げ、フランス社会に、異なるものへの想像力の欠如・恐怖・拒絶がみられるようになり、まさに、共生の危機的状況にあることが指摘された。

そのようなフランス社会の状況を踏まえ、「よりよい共存」に向けて、差別是正対策、貧困対策、反セグレーション的コミュニティの構築、「見えない境界

線」を超える「橋」の建立が重要であることが強調された。



森先生 基調講演

ついで、講演1として、アガスティン・サリ上智大学総合グローバル学部教授による「多文化社会と排他的要素ーインドの事例ー」では、

インド社会は、宗教、言語、カーストの要素に由るアイデンティティを過度に強調する集団によって構成されているが、そのような複数の単一文化社会においてそれぞれの集団が自らの単一的アイデンティティを強調することこそが、排他主義の源泉であることを指摘し、アイデンティティ政治による排他傾向が増大していることに対して、民主主義政治体制の確立が必要であることが強調された。



高木先生、小島先生 講演司会



アガスティン・サリ先生 講演

講演2は、門田美恵子元養護教諭・校長による「子どもの生存を脅かすもの」では、生存を脅かすものとして、いじめ、虐待、貧困、不登校、摂食障害を取り上げ、そのような事態に直面したときに、家庭、学校、行政はどのように対処すれば子どもを守ることができるのか、自らの経験した具体例を紹介しながら、とくにその手法について講演された。

それぞれの事態への対応は様々で、一定の対応法があるわけではないが、もっとも大事なことは、いずれの事態であれ、できるだけ早期に事態の存在に気づくことであり、子どもの発する助けを求めるサインを見逃さないことが重要であることが強調された。



門田先生 講演

とくに、家庭内虐待の場合、子どもは、親に見捨てられないように虐待を隠す傾向があり、虐待サインを学校側が早期に把握することが必要であると述べられた。

講演3は、松下正明東京大学名誉教授による「高齢者差別と虐待」では、日本の社会のあらゆる領域で、高齢者偏見・差別（エイジズム）が蔓延していること、最近では高齢者虐待が増加し、とくに認知症の人を介護する介護施設内での介護職員による虐待が激増していること、介護施設における認知症の人の殺害の事例がしばしば報道されるようになってきたこと、2016年7月に発生した相模原知的障害者施設での元職員による大量殺人事件（19名殺害）にみられる思想「生きるに値しない



松下先生 講演

生命の抹殺」が日本の社会でも若者の間にみられるようになってきていることなどが指摘された。これらの弱者抹殺の状況については、実態を把握するとともに、行政やメディアにおける対応の必要性が強調された。



パネルディスカッション



小泉先生
閉会のごあいさつ



第5回生存科学シンポジウムに71名の参加者がありました。当日は参加者にアンケートをお願いしました。アンケートの回収率は41%で、シンポジウムをメール案内等で知った方が60%、関心あるテーマについては、高齢社会、医療問題、環境問題と回答された方が70%の結果でした。

2018年度第6回生存科学シンポジウムの開催に向け、企画してまいりますので、皆様方のご協力、ご支援を宜しくお願いいたします。

対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造

第5回研究会報告

研究責任者 吉田 浩子

2017年12月3日(日) 15:00～17:00にSkypeにて第5回自主研究会を開催した。研究会メンバー6人中5人が出席した。

10月末に研究会メンバーの手元に調査のデータベースが届き、研究会メンバー北川を中心にデータ処理の作業を行った。また、報告書作成に向けて得られた結果を共有し、そのデータの解釈に関する討議が行われた。

得られた結果から、分析対象とした医師、看護師、医療ソーシャルワーカーの8割が何らかの職務上の葛藤を体験していることがわかった。職種により葛藤の対象に違いがあり、医師は「制度や法律」、看護師は「同僚の価値観」、医療ソーシャルワーカーは「患者の家族の様子」に対し葛藤を抱える傾向があった。これらの背景にある倫理観(あるいは道徳観)を明らかにするために、「モラル・ファンデーションズ・クエスト」(日本語版 金井良太 2013)の尺度得点を用いて因子分析を行った。すべての職種で3因子が抽出されたが、各因子に含まれる項目は異なっていた。いずれの職種における因子分析結果も、5因子を抽出したとする金井ら先行研究の結果と異なっていたため、各因子の解釈とその妥当性について議論し、先行研究を参考に、各職種の倫理綱領や職業的価値として良く用いられる用語を因子の解釈に用い因子名とすることで合意した。班員のそれぞれの職務経験等から、抽出された因子ごとに因子名を検討し、最も妥当と思われる因子名を確定した。その上で、各因子間の関連から概念図を作成できるかどうか、その可能性を検討した。今回の討議を踏まえて、吉田が中心となって報告書をまとめ、「生存科学」雑誌28-2号に投稿することになった。

事務局だより

事務局長 小丹 恵子

昨2017年4月より生存科学研究所事務局に勤務させていただいております。小丹(こたん)でございます。2017年3月まで東邦大学に40年間勤務しておりました。

これまで私は「人」に恵まれた環境で業務を行ってまいりました。「仕事は楽しく」をモットーとしています。お陰様で、生存研に勤務後も多くの方々にご助言いただきながら楽しく仕事をしております。感謝の気持ちを忘れず取組んでまいります。

生存研の事務局には現在、事務補佐の伊藤徳子を含め2名が勤務しております。

だいぶ前に、「じんざい」についての記述を目にしました。「じんざい」には以下の4つがあるということです。

「人財」は、何でもできて宝となる人

「人材」は、働きのある役に立つ人

「人在」は、何もせずいるだけの人

「人罪」は、いるだけで罪になる人

昔から人は石垣、人は城と言われていました。どんな組織でも人財、人材を求めているでしょう。組織がどんなに整備されて経済的に恵まれていても人在と人罪が多ければ、やがて石垣は崩れ、城は攻められなくても落城してしまうでしょう。

自分自身を顧みても、「人財」を目指して、せめて「人材」になりたいと思います。誰も「人在」や「人罪」にはなりたくないと思うのが普通です。ところがどの辞書を見ても「じんざい」には「人材」の項目はあっても人財、人在、人罪は載っていないのです。ただ、「人在」については、存在するだけで周囲の人々を幸せにする人と解釈すると、大切な人ともいええます。仕事ができなければ組織では認められないのですが、合理化が進みIT革命で、会話なしでことが進んでいく世の中では、

「人在」も必要となるのではと思うのですが。

「じんざい」は自分が評価するものではないことを意識し、粛々と真面目に取り組んでいこうと考えています。



左: 伊藤 右: 小丹

生存科学研究ニュースへの 話題提供募集

生存科学ニュースは、生存科学研究所会員の皆様のコミュニケーションツールです。生存研の紹介、研究活動、多方面で活躍されている会員の様子など、新鮮な話題をいち早く取り上げ、「今」を皆様にお伝えしてまいります。話題提供をお願いいたします。